

本校の目指す体育学習

～子どもの目線から技能をとらえなおした授業づくりとは～

(1) 指導要領の改訂に見る「特性」と「技能」

平成23年度に完全実施された学習指導要領において、次の5項目が改訂の方針として示された。

- ① 生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点を重視し、各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、児童の発達の段階を踏まえ指導内容の明確化を図ること
- ② 指導内容の確実な定着を図る観点から、運動の系統性を図るとともに、運動を一層弾力的に取り上げることができるようにすること
- ③ 体力の向上を重視し、「体づくり運動」の一層の充実を図るとともに、学習したことを家庭などで生かすことができるようにすること
- ④ 保健については、身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容を重視し、指導内容を改善すること
- ⑤ また、健康な生活を送る資質や能力の基礎を培う観点から、系統性のある指導ができるよう、健康に関する内容を明確にすること

これを前回の指導要領と比較すると、大きな改訂点としてあげられるのが、指導内容の明確化と体系化である。これは、子どもの体力低下が深刻な問題となっていることを受け、子どもに身につけさせたい具体的な内容（技能）を明確に示したものと見える。また一方、変わらず強調されていることが、生涯スポーツの基礎を培う観点から運動の有する特性や魅力に応じた指導の重要性である。

つまり、これから体育学習を進めていく上において、運動の特性を味わわせることと運動内容（技能＝特有の面白さ+技術）を身につけさせることを両立させることは不可避なことといえるのである。

(2) 子どもの目線からとらえなおした「特性」「技能」

しかし、その二つは元々相反することなのだろうか。確かに、これまでは「運動の面白さ」を子どもの主観的な感じ方ととらえ、一方では「技能」を運動の客観的な構造ととらえる考え方があった。そのために、「面白さ」が先か「技能」が先かといった議論が起こった。つまり、「技能主義」といわれる体育では「まず技術を教えよう。そうしたら楽しさもわかるだろう」という形で、技術を積み上げ、最後にゲームをするといった順序性が強調されたし、逆に「面白さ」を優先する体育では、「面白さ」を類型化し、例えば「サッカー」であると「チーム対チーム」の競争の面白さ、いわば「ゲーム」の工夫にのみ目がいき、活動はあるが、結局技能は身につけていないという状況もあったのである。

そこで、「技術（テクニク）」と「面白さ」をしっかりと結びつけた「運動の特性（その運動が本来持っている、できる／できないの面白さ）」のとらえ方が大切となる。例えば、バスケットボールでは、単にドリブルやパスの面白さを楽しんでいるのではなくて、「ドリブル」や「パス」などの技術（テクニク）を使いながら、「ボールを前に運べるか／運ばせないことができるか」という攻防の面白さを楽しんでいるという考え方が、子どもの目線からとらえなおした技能ということである。そこで、「立北スタイル」では、

**技能 = 意味（その運動特有の面白さ）
+ 技術（テクニク）**

ととらえ、

運動の特性＝技能（できる/できないの面白さ）

ととらえることから、授業づくりを考えていくことにした。

（3）立北スタイルにおける系統性と系統的カリキュラム

次に運動の系統性についてであるが、「立北スタイル」では上記したような考えのもと、「子どもがその運動の面白さを実感できる状態の高まりとそれに伴い必要となる技術（テクニク）の高まり」を系統性と考えている。以下、平成21年度から23年度までの3年間、研究実践したネット型（低学年：ボールゲーム、中学年：ネット型ゲーム、高学年：ボール運動ネット型）の領域を例に述べていく。

（ネット型ゲームの考え方）

本校のボール運動の指導は、運動の特性にもとづいた「局面学習」の考え方で進めている。「局面学習」とは、その運動の「できる／できない」の面白さがどこにあるかをとらえ、主体的に学習し技能や運動の面白さを身に付けさせようとする考え方である。

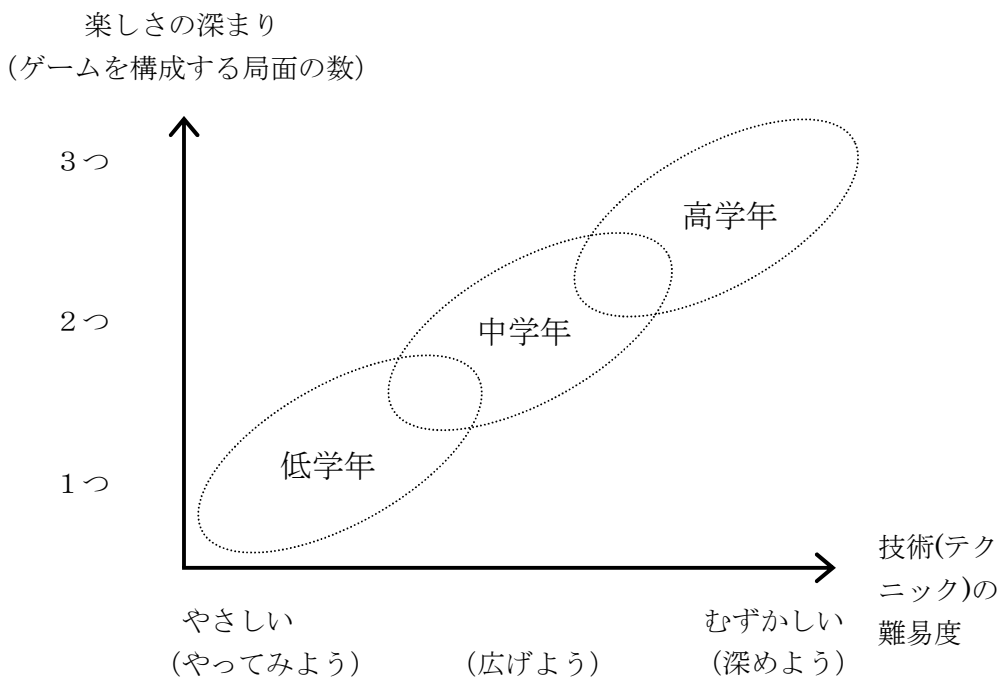
まず、ネット型ゲームにおける特性を、「ボールを味方コートに落とさせないことができるかどうか」「落とさせなかったボールを組み立てる（相手をだます）ことができるかどうか」「ボールを相手コートに落とすことができるかどうか」という3つの局面から成り立っていると考えた。そして、それぞれの局面における「できる／できない」の面白さと一体に「レシーブ・トス・アタック・ボールへの動き・あいているところを見る動き・味方と一体となって相手をだま

すコンビネーションプレー」等の技術（テクニック）も高まると考えた。そう考えたときに、いわゆるボールをはじく技術（テクニック）が低い小学生が、その局面の面白さを味わうことが難しい状況であること。言い換えると、その面白さを味わうことを中心に考えると、ボールをはじくことにこだわる必要がないと考え、ボールのキャッチを認める「キャッチバレーボール」を単元化することにした。

カリキュラムについては、児童の発達段階を考え、低学年は「落とさない」から「落とす」を中心とした単元『にんにんバレー』を、中学年は「落とす／落とさない」から「落とす／落とさせない」を中心とした単元『キャッチバレーボール』を、そして、高学年では「落とす／落とさせない」から「組み立てて落とす／落とさせない」を中心とした単元『キャッチバレーボール』を考えた。

また、単元展開は、できるだけやさしいゲームでそれぞれの面白さを今ある能力で実感させ、低学年では、落とさない得点化から落とす得点化の工夫で、中学年は、落とす場所に視点を持たせることで、また、高学年では、コンビネーションを使った組み立てに視点を持たせることで、面白さを広げ、深めるとともに、それに伴う技能の指導を行った。

系統的なカリキュラムの概念図（ネット型）



(4) 立北スタイルにおける単元展開

「立北スタイル」においては、子どもがその運動の面白さを実感できる状態を高め、それとともに必要となる技術（テクニック）が高まるように3つの段階から学習過程を考えた。

【第1段階】 やってみよう（共通のねらいを持った内容）

特性を知る段階。面白さの中身を実感し、やさしく理解する段階。

【第2段階】 広げよう（各自のねらいを持った内容）

身につけた技能をもとに、活動を広げる段階。教師からでも自分からでもいいので、幅を広げていく。

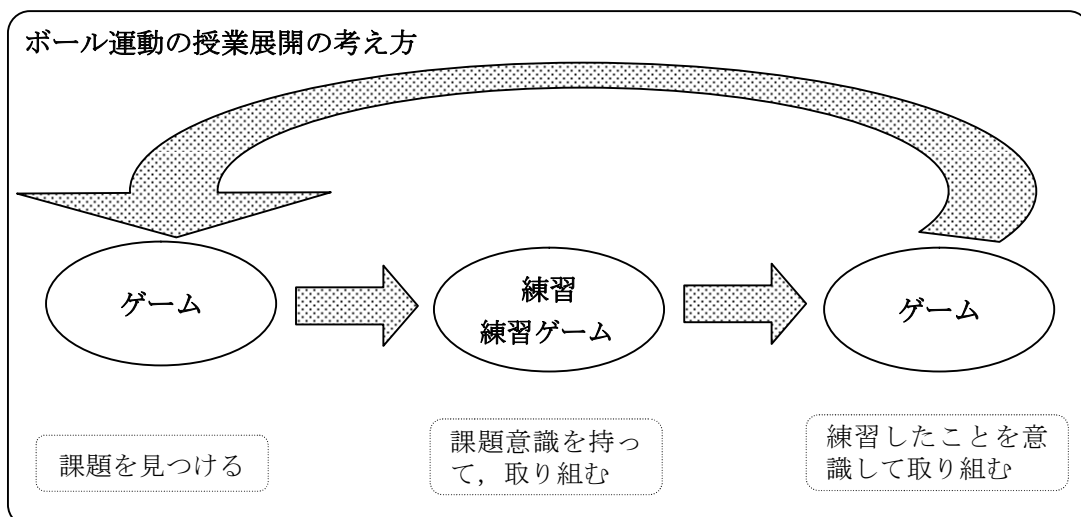
【第3段階】 深めよう（より複雑な内容）

自分やグループで身につけた技能（作戦）を活用し、深めていく段階。

各時間の展開においては、ゲーム→振り返り→練習→ゲームという流れが、連続的に起こるように工夫することを基本的な展開とした。

また、意味と技術（テクニック）がセットになるという視点から、例えばキャッチボールにおいては、その指導を単に技術（テクニック）や「作戦」を型として身につけさせることから行うのではなく、ゲームから子どもの学習課題（内容）を引き出す授業を構成した。

具体的には、「攻防をすること」の面白さとそのための方法を教えるという視点から展開を行い、子どもたち自身が主体的に習得すべき「技能」や「作戦」の意味づけを行えるように考えた。



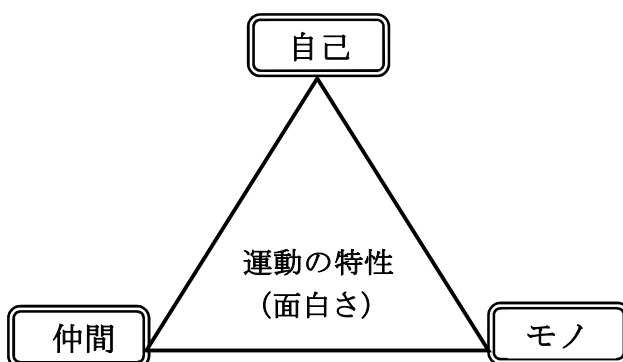
(5) 今年度の実践

① マットを使った運動遊び、マット運動の特性をふまえた授業づくり

器械運動領域においても技術を習得させることが目的ではなく、それを使って運動遊びや運動を楽しみ、生涯体育につなげていく。そのためにマットを使った運動遊び、マット運動の特性をとらえなおし、その特性にふれることができる学習過程を考える。

② 『自己・モノ・仲間』から見た学習過程の工夫

体育で教えなければならないことは、単なる体の動き（技術）だけではなく、『自己・モノ・仲間』が関係して出来上がった運動の世界（特性）である。その『自己・モノ・仲間』から学習過程を工夫する。



低学年・・・『モノの工夫』



中学年・・・『自己の工夫』『仲間の工夫』



高学年・・・『自己の工夫』『仲間の工夫』

